迷わず駆け込みたくなる避難場所つくり　～学校へ行こう！～

はじめに　～気象警報発令時の共働き家庭あるある～

子どもが就学してから、気象情報チェックが欠かせなくなった。なぜなら、気象警報が発令されると、小学校が休校になるから。休校になれば放課後児童クラブも閉所。災害発生の危険性が高まる状況下で子供を1人留守番させるのも忍びない。困ったときの実家頼みといきたいところだが、70 歳を超え歩行に杖が欠かせなくなった両親に甘えるわけにもいかない。でもそういう日に限って予定が入っていて、仕事が休み辛い状況だったりする。「この間も私が休んだから、今度はあなたの番でしょ？」「そんなこと言われても俺急に休めないし」と、夫婦間でちょっとしたバトルとなるが、結局休むのは母親である私の方が多い。保育園は、台風だろうが大雨だろうが関係なく預かってもらえた。ありがたがったなぁとつくづく思う。

大雨のなか考えること　～避難しろと言われても～

かくして子供とふたり家に篭る大雨の休校日。雨が強まって避難勧告メールが頻繁に届くようになるにつれ、避難すべきなのか？と不安が募る。でも居住地域の避難場所は、山裾にある 2 階建ての小さな集会所。マンション中層階の我が家のほうが安全に思えて、結局避難しない。

大雨による浸水被害が多発している昨今、体育館や集会所といった低層階の施設が安全な避難場所だとは思えない。おまけに、体育館の床は固く快適に座ったり寝転がったりできる場所ではない。避難所で窮屈そうに毛布にくるまり床の上で寝ている人の様子がよくニュースで流れるが、もう少し快適な避難場所はないものか…と思ってしまう。

「避難勧告等に関するガイドライン」が平成 31 年 3 月に改定され、自らの判断で避難行動をとることができるよう、防災情報提供のあり方が強化された。だが、いざというときに「あそこは快適に過ごせる場所だ」と思える避難場所がなければ、積極的に避難する人は増えないのではないだろうか？より迅速で適切な避難行動を促すには、情報だけでなく、安心・安全・快適に過ごせる避難場所の提供が重要なのではないか？

理想の避難場所　～そうだ、学校へ行こう！～

そこで考えた。避難場所としてよく指定されている小学校や中学校を、理想的な避難場所として整備できないだろうか？

学校は本来、避難場所として作られた施設ではないので、体育館の固い床のように決して快適な環境とはいえないし、一般的に体育館が 1 階にあるので、大雨時は浸水が心配だ。

なので、既存の学校建物の上に避難施設を増設してはどうだろうか。3 階建ての学校ならば 4 階以上を増設して避難施設にしたり、体育館の床を上げて 1 階部分を倉庫やピロティ、2 階を通常の体育館、その上を小競技室や剣道・柔道場にして、災害時は避難所として開放する。

停電時も車椅子やストレッチャー・ベビーカーで移動できるよう、スロープ階段を用意。室内は快適に過ごせるよう、床を畳やクッションフロアにする。明るく落ち着いた内装にして、閉塞感をなくす。パーティションを用意して臨機応変に部屋を間仕切りできるようにする。

非常時に家庭科室を炊き出し場所にしたりプールをお風呂として活用できるよう既存の施設も改築できれば、より理想的になりそうだ。とはいえ学校が避難所として開放中でも通常の授業ができるよう、児童生徒用とは別に避難者用出入り口を用意し、階段やエレベーターも分け、特

別な時以外は学校部分と避難所が自由に行き来できないようにするなど、避難スペースと学校スペースはきちんと分けるべきだろう。災害時でも学校で普段通り過ごすことができたら、子どものストレスも軽減されるのではないか？活気ある子どもの声が学校から聞こえてくることで、元気付けられる大人もいるかもしれない。

もともと学校は、どの地域にも身近に存在し、広さが十分あり、認知度も高い公共施設だ。ちょっとした工夫で学校は、災害時に誰もが「そうだ、学校へ行こう！」と安心して頼れる避難場所として、地域のシンボル的存在になるような気がする。

コミュニティスペースとしての避難場所　～より身近な場所へ～

ただ、有事の際だけ開放される施設だと、身近な存在として認識されにくい。ならば、普段から地域の人が集うスペースとして開放することを前提に避難所を整備してみてはどうだろうか？

例えば、平常時はカルチャー教室やサークル活動用の研修室として開放すれば、普段から避難所に定期的に通うことで馴染みの場所となり、災害時にも抵抗感なく避難できそうだ。他にも、お年寄りが集まってのんびりできるサロンや子連れのママ友・パパ友が集まる遊び場付きのフリースペースがあれば、平常時・災害時に関わらずストレス解消の場として役立つだろう。

夜間は宿泊施設として活用。子どもがお泊り会をしたり、卒業生が同窓会を開いたり。交通機関の運休で帰宅難民となった人たちの駆け込み寺としても役立つかもしれない。

そうだ、放課後児童クラブも開設すれば、学校からすぐ通えるし安全だ。避難所内に放課後児童クラブがあるなら、もしかすると災害時も普段通り開所できるかもしれない。そうなれば、災害時こそ出動が必須な仕事に就いている共働き家庭も少しは安心できるだろう。

あと、地域の人が集うスペースが学校と隣接しているのだから、授業の一環として児童・生徒と地域の人が交流する機会を定期的に設けてはどうだろうか。PTA 保護者を介さなくても学校と地域交流の機会が自然と増えることで、PTA 活動のスリム化に繋がるといいなぁ。

避難場所を中心としたMaaS　～誰もが安全に移動できる地域に～

避難場所の整備だけでなく、その施設へ安全に移動できる交通手段の整備も同時に必要だろう。地域住民が全員車を持っているわけでもないし、自転車や徒歩での移動に支障がない人ばかりではない。平常時・災害時にかかわらず、立ち寄りやすくするためにはどうしたらいいか。

まずは、学校を起終点としたコミュニティバスや乗合タクシーを整備。スマホなどを使って、誰もが手軽にバスの運行状況を確認したり、タクシーを手配できる地域密着型の情報網があると便利ではないだろうか。災害時には臨時バスや乗合タクシーを走らせ、運行情報をいち早く提供する。歩行が困難で避難の際にヘルプが必要な人は事前登録してもらい、災害時には自宅まで迎えにいくサービスがあってもいいかもしれない。平常時だけでなく災害時の避難行動を踏まえて、避難場所を中心とした MaaS（Mobility as a service）を構築していくことが重要になるだろう。

さいごに　～明日は晴れるかな～

ついつい妄想にふけってしまった大雨の休校日。現実的ではないことばかり思いついたけど、妄想するのは自由だし、まぁいいか。今は実現不可能な突拍子のない思いつきでも、いつか実現することがあるかもしれない。

誰もが安心安全に過ごせる世の中になるといいな、と未来に思いを馳せながら、子供とふたり、少しずつ空が晴れていくのを待っている。